

一水さしの上に、茶巾茶筌茶杓置合ても、一ツに用

一架に道具を置合ル時、羽箒に香合、環もたせ懸置たるは、一ツに用、放して置たるは、二ツに用

一釜は爐風爐共に座しきの亭主と定めて、珠光より以後、道具の數に用不申候、よろづ道具の莊數定法は、右之段々心得數を可定數々在之候、扱又道具によりて、莊合、置合、組合と云事、在、茶入、茶碗、水さし、花生、香合、其外名物の類は、莊合と云、又柄杓、竹輪、環、羽箒等は置合ルと云、又炭斗に環、火箸、羽箒を入半駄に、底取長火箸を組、炭斗には色々炭入ルを組合ルと云也。

〔總見記十五〕伊達別所飛驒國司等參味方事附御茶湯事

同月○天正三年十月廿八日、御遊興ノタメ、京堺ニ於テ、茶湯ニ名ヲ得シ者ドモ、ヲ十七人エラビ召寄ラ

レ御茶被下、生前ノ大幸、冥加至極ノ仕合ト申シ悦ビ奉ル、御座敷飾ノ次第、御床ニ晚鐘三日月、扱違棚ノ置物、茶臺ニ、白天目内赤ノ盆ニ御茶入ツクモガミ、下ニハ香合シメキリ被置、オトゴセト

云フ御釜、松島ト云フ御壺、茶ナリ御茶童ハ千宗、易後ニハ利休居士ト云フ、當世無雙ノ名人ナ

リトテ、此者ニ被仰付ケリ、（此處に茶湯の儀を記す）〔茶窓閒話上〕金森宗和、加藤何がしハ示されしは、茶道は取合が肝要なり、た見へば白木造りの

結構なる書院の庭に、松根栢など植込し中に、藁屋の數奇屋を見わたせば、奥深く寂ておもしろく見ゆるなり、田舎邊の草屋ばかりの中に、二階作りの家土藏など高く見ゆるは、さびたる中の富貴なる體、何となくおくゆかしく思はるゝなり、こゝが茶道の取合の心得ぞといはれしよし、

今も掛物は名僧の墨跡のあとに、瓢の花いけ、又は青竹などを用ひ、唐物か古瀬戸の名ある茶入に、今出の樂燒國燒などの茶碗を取合するの類も面白し、但しあまりにおもしろがらせんとては、却て不道化におちいる事多し、又いづれも同じ取合せもよろしからず、其時々の機變こそ肝要なれとなむ。